

松本昌介
飯塚希世
竹下忠彦
中村尚子
細渕富夫 ● 編

戦時下、激化する空襲と食糧不足のなかで、
肢体不自由児は、視覚障害児は、
聴覚障害児は、
そしてその家族や教育者たちは、
どのような生活を強いられ、生き抜いたか。
強壮な兵士になることだけが
子どもたちに望まれた時代の
障害児たちの
貴重な生活記録！

[編集復刻版]

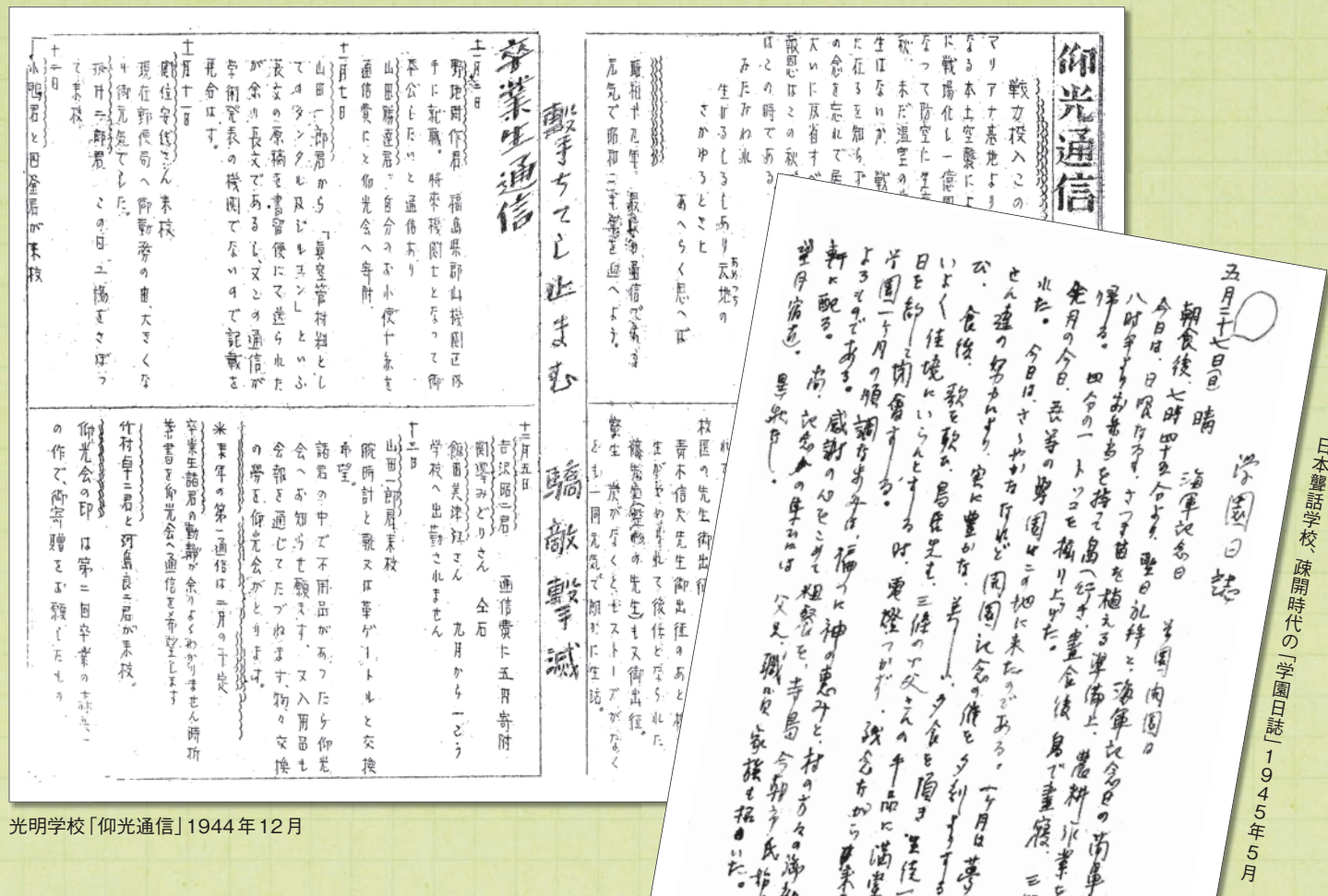
障害児 学童疎開 資料集 全4巻

戦争の激化に伴い、地上戦が予測される地域や空襲の対象になる都会から学齢児童を「避難」させる「学童疎開」は、一九四四年から本格化する。
兵士の供出とともに家族を引き裂く学童疎開は、次世代の兵士である子どもを生かす延びさせる「戦闘配備」と称され、同時に空襲対策の「防空活動」に足手まといになる幼少年を強制的に退去させるものであった。
東京、大阪など都市部の学童たちの集団疎開や縁故疎開が進むなか、しかし、肢体不自由児や視覚障害児、聴覚障害児の疎開は「国の役に立たない者を助ける必要はない」と最後の最後まで後回しにされ、疎開後、戦争が終わったのちも、もつとも遅い帰郷となった。
疎開先から発せられた肢体不自由児学校・東京都光明国民学校の「通信」には、卒業生から兵役に就くものが出た際に、自分たちの学校から皇国の兵士が現れたと喜ぶ声が載り、また故郷の家族を心配させまいと元気にふるまう子どもたちの様子が描かれる。
学童疎開とはなんだったのか。障害のある子どもは戦争の時代をどう生きたのか。子どもたちの手記を中心に、学校の教務日誌・通信など貴重資料を収集し、復刻する。

- 揃定価 ——— 8万円＋税
- 配本 ——— 全2回配本
- 序文 ——— 逸見勝亮
- 推薦 ——— 大門正克・菊地澄子・藤井克徳

六花出版

内容見本



光明学校「仰光通信」1944年12月

刊行にあたって

戦時中、障害児やその親御さんたちはどんな思いで過ごしたの
 だろうか。

米軍による空襲が激しくなつて、幼い子どもたちは家族で農村部に、あるいは学校単位で集団疎開した。しかし、手がかかり、戦力として期待できない障害児は疎開計画にも入れられず、都会に取り残された。

肢体不自由児の学ぶ都立光明国民学校は、取り残されて、世田谷の校舎に寝泊まりし、校庭に防空壕を掘って空襲の時は教員が子どもを抱えて逃げた。

空襲が激しくなり、ここも安全ではないと校長が疎開地を探し、一九四五年五月、長野県上山田温泉に疎開した。東京の校舎は焼け帰れないまま四年間不自由な生活を強いられた。

東京に残った家族も家を焼かれることもあった。その親元に毎月わら半紙の手紙が届いた。「学寮通信」と名付けられた一枚の手紙に親はどれだけ安心しただろうか。この通信は校舎が再建されて東京に復帰するまで四年間発行され続けた。

盲学校、聾学校もそれに近い不自由な生活を送った。教職員も疎開受け入れ側も障害児を守るために努力した。

障害児と教職員、家族と受け入れ施設それぞれの努力を記録しておきたい、そんな思いでこの資料集は作られた。

学校統廃合の中で貴重な戦中戦後の記録は失われ、疎開経験の障害者は高齢化していく。

この仕事は今やらねばならない、そういう願いを込めて障害児の疎開体験、戦中戦後の学校教育の資料を求めてわれわれは長年動き回った。

ふたたび障害児が戦争によって当たり前の学び、生活することが奪われてはならない、そういう思いを込めてこのシリーズを作った。

編者代表 松本昌介



関連年表

年	月	事項
1938	4	「国家総動員法」
1941	4	「国民学校令」施行
1942	12	「防空法施行令」
1943	2	米空軍による日本本土初空襲
	4	日本軍、ガダルカナル島撤退
	5	アッツ島守備隊全滅
	10	次官会議で任意の「人口疎開」を誘導
	12	「都市疎開実施要項」で疎開を勧奨
1944	3	「京浜地域人員疎開の措置要領」で防空体制強化
	4	東京都の養護学園、夏季施設が疎開学園に順次移行、東京都内の盲学校、聾学校、授業停止
	5	東京都立聾学校、東京都立聾啞学校、疎開学園開設
	6	閣議決定「学童疎開ノ促進ニ関スル件」で縁故疎開・集団疎開を推進
	7	サイパン島守備隊全滅
	7	「沖縄県学童集団疎開準備要項」
	8	沖縄の学童疎開船・対馬丸が撃沈される。犠牲者1400人以上
	8	光明国民学校の児童、麻布分教場を閉鎖し、世田谷の本校に移動し、59名が泊まり込む（現地疎開と呼ばれる）
	8	藤倉学園（大島）、山梨県清里へ疎開
	9	東京都、集団疎開児童の輸送完了
	9	官立東京盲学校、官立東京聾啞学校が集団疎開
	10	大阪、横浜、名古屋、集団疎開児童の輸送完了
1945	3	硫黄島守備隊全滅
	3	10日、東京大空襲
	4	日本聾話学校、長野県滋野村へ集団疎開
	5	15日、東京都光明国民学校児童、長野県上山田温泉へ集団疎開
	4～5	官立東京聾啞学校、光明国民学校世田谷本校及び麻布分教場、空襲で焼ける
	6	沖縄守備隊全滅。沖縄戦の終結
	8	敗戦
1946	3	ほとんどの国民学校児童、学童集団疎開から帰京
1949	5	光明小中学校、疎開から帰京

日本聾話学校が戦時中、保護者に向けて空襲警報発令時に注意を喚起

史料から浮かんでくる 肢体不自由児たちの戦時・戦後

大門正克（横浜国立大学教授）

「一〇〇五年ころ、松本昌介さんのご自宅を訪ね、『仰光通信』や『学寮通信』『クラスの友』など、光明学校の疎開中や戦後の史料を拝見させていただいた。二〇〇〇年に、農村と都市の子どもを対象にした『民衆の教育経験』（青木書店）を発売した私は、その後、植民地の子どもや在日朝鮮人の子ども、肢体不自由児などに視野をひろげ、戦時下の統合についてさらに深く検討する必要性を痛感していた。肢体不自由な子どもたちは戦時下と戦後をどう生きたのか、松本さんのお宅で拝見する史料のなかに、私は子どもたちの足跡を追った。

今でも印象深く覚えていることは、独力で実施した光明学校の学童集団疎開は大きな困難をかかえたが、国民学校の学童集団疎開時における子どもの日記には戦意高揚の文章が多くみられたのとくらべると、光明学校の子どもの集団疎開時の日記にはそのような言葉がほとんどなく、冷静な記録という印象があったことである。私はそこに、光明学校は東京で「生活科」や「適性」の時間などにより、将来の自立をめざす教育を進めており、そのことが戦時下の子ども意識に反映したのではないかと考え、「子どもたちの戦争、子どもたちの戦後」（『岩波講座アジア・太平洋戦争』第6巻、岩波書店、二〇〇六年）をまとめた。

本資料集からは、学童疎開時における肢体不自由な子どもたちの生活や意識を鮮明に知ることができるとともに、戦争が子どもたちをどう統合したのか（しなかったのか）を考えることができる。ぜひ推薦したい。

（おおかど・まさかつ）

推薦します

障害児と教師の 戦時下からのことづけ

藤井克徳（NPO法人日本障害者協議会代表）

遠く

い過去からずしりとした「ことづけ」が届いた。七〇年も八〇年も沈黙しながらよくぞ辿り着いたものだ。「ことづけ」が放つメッセージは、古くささを感じさせない。むしろ、今だからこそ心に染みる。崩れかけたわら半紙にしたためられた文字は、もはや文字の域を超えている。これを言霊と呼ばずして何と言うのだろうか。

そんな言霊の詰まった、戦争と障害者の生活を重ねた「証言集」が蘇った。過酷な環境の中で必死に記録を綴ってくれた教師たち、「ごくつぶし」呼ばわり時代の胸中を書き遺してくれた障害当事者たち、戦中・戦後の混乱期から現在まで資料原本を守り続けてくれた人たち、復刻の書にこぎ着けてくれた関係者……、これらの人々の間に必然性があったとは思えない。

偶然も重なっての見事なまでの群像合作という他ない。一つ共通点があるとすれば、それは「残す」へのこだわりであろう。「残す」の営みは、今、「未来への回想」として新たな価値を発揮してくれようとしている。一人でも多くの人に触れてほしい。とくに、戦争と障害のある人の関係を知りたい人、そして歴史から平和を学びたい人に。耳を澄ますと聴こえてきそうだ。疎開地からの障害児と教師の声が。

（ふじい・かつのり）



「障害ある子どもと戦争」の 歴史を刻むために

菊地澄子（児童文学作家）

『障

害児 学童疎開資料集』が復刻された。ここには、

光明学校の学童たちが疎開先から親元へ毎月送り続けた『学寮通信』という疎開生活の記録、『仰光通信』という卒業生向けの通信がはいっている。疎開中に卒業して東京へ帰った中学生たちは、焼け跡に集まって『学校通信』を発行し、文集も作っていた。戦後の物資不足のなか、紙や謄写版インク等も乏しく、大変だったろうに。

都立光明特別支援学校は、一九三二（昭和七年）に日本で初めて開設した肢体不自由児学校である。戦争が激しくなり、国は将来の兵士育成を考え、一九四四年、国民学校（現小学校）三年～六年生の学童疎開を決定し、都会の学校には急いで学童疎開をさせたが、光明学校までは手が回らないと突っ撥ねた。光明学校では校庭に防空壕を掘り、校内宿泊させて児童を守りながら、自力で必死に疎開先探しに奔走。そして一九四五年五月にやっと、学童五九名と教職員たちは、長野県の上山田ホテルに疎開できたのである。そしてその直後、東京の光明学校は空襲に遭い、大半が焼失してしまった。この三カ月後、日本は戦争に敗れた。

翌年の三月、学童疎開は解消されたが、光明学校の児童たちは帰る学校がないのだ。敗戦後も四年間、上山田で疎開生活を余儀なくされた。

日本で一番遅く学童疎開をし、一番長期間疎開生活をした肢体不自由児たちの、戦争末期から戦後へかけてのこの体験記録は、日本の歴史の真実を語る貴重な役割を果たすものと信じてやまない。

（きくち・すみこ）



日本聾話学校の学童が疎開していた蚕室（写真は戦後のもの）。写真はこの1点を除いてすべて光明学校の疎開の様子



収録資料

◆第1巻

誌名●号(報・No)●誌名●号(報・No)●発行年月(推定したものは*)
《光明学校Ⅰ》
光明通信●一九四四・九*
仰光通信●一九四四・一二
仰光通信●一九四五・一二
学寮通信●第一号●一九四五・九
学寮通信●第二号●仰光通信●第一報●一九四五・一〇
学寮通信●第三号●仰光通信●No.2●一九四五・一一
学寮通信●第四号●仰光通信●第三号●一九四五・一二
学寮通信●No.5●仰光通信●一九四六・一
学寮通信●臨時増刊●仰光通信●2月特別号●一九四六・二
学寮通信●第六号●仰光通信●No.5●一九四六・二
学寮通信●特別号●一九四六・三
学寮通信●第七号●仰光通信●第六号●一九四六・三
学寮通信●第八号●仰光通信●第七号●一九四六・四
GAKURYO NEWS●No.9●仰光通信●第八号●一九四六・四
仰光通信●第九号●一九四六・五
学寮通信●第十号●一九四六・五
学寮通信●No.11●仰光通信●第十号●一九四六・六
学寮通信●第十二号●仰光通信●第十一号●一九四六・七
仰光通信●第十二号●未見
学寮通信●第十三号●未見
学寮通信●第十四号●仰光通信●No.13●一九四六・九
学寮通信●第十五号●一九四六・一〇
仰光通信●No.14●一九四六・一〇
仰光通信●第十五号●一九四六・一一
学寮通信●第十六号●一九四六・一二
仰光通信●第十六号●一九四六・一二
学寮通信●第十七号●一九四六・一二
学寮通信●第十八号●一九四七・一
仰光通信●第十七号●一九四七・一
学寮通信●第十九号●一九四七・二
GYOKO TUSIN●No.18●一九四七・二
学寮通信●No.20●仰光通信●第十九号●一九四七・三
学寮通信●第二十一号●仰光通信●第二十号●一九四七・四

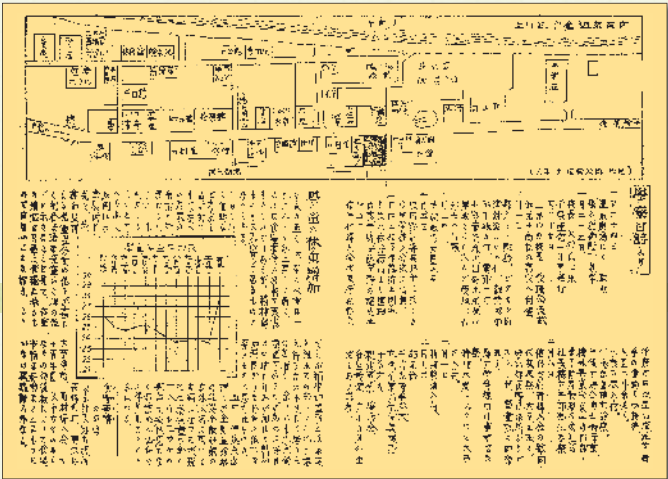
◆第2巻

《光明学校Ⅱ》

肢体不自由児の学校と教育●No.1●未見
肢体不自由児の学校と教育●No.2●一九四九・三
肢体不自由児の学校と教育●No.3●一九四九・四
肢体不自由児の学校と教育●No.4●一九四九・八
肢体不自由児の学校と教育●No.5●未見
肢体不自由児の学校と教育●No.6●一九五〇・二
肢体不自由児の学校と教育●No.7●一九五〇・五
肢体不自由児の学校と教育●No.8●未見
肢体不自由児の学校と教育●No.9●一九五一・七
肢体不自由児の学校と教育●No.10●一九五一・一
東京市立光明学校概覧●一九三四・四
東京市立光明学校学則●一九三六・四
新築落成記念誌●一九四一・二
創立十周年記念誌●一九四二・二
東京市光明国民学校現況●一九四三・五
光明国民学校概覧●一九四四・四
光明国民学校学童疎開ニ関スル件●教育局長●一九四四・五
戦時疎開学園調(一九七・一四)●国民教育課●一九四四・七
秘疎開学園調(一九七・八現在)●教育第課学事係●一九四四・七
旧戦時疎開学園収容児童ノ疎開先ニ於ケル教育及主要食糧等ノ生活物資配給方ニ関スル件●一九四四・九
答辞●一九四五・三
送辞●一九四五・三
昭和廿年度卒業記念誌●一九四六・三
答辞●一九四六・三
事務引継ニ関スル件●東京都世田谷区長／東京都長野出張所長●一九四六・三
本校の卒業生●一九四六・六
卒業生諸君へ●一九四七・一〇
クラルテ●第一号●一九四八・一
〔臨時会計〕●一九四八・二
仰光会員状況調査表昭和23年春●一九四八・五
趣意書第一回仰光の集い●一九四八・七
学びの幾歳卒業記念号●一九四九・三

仰光通信●第20号(2・3頁欠)●一九四七・五
学寮通信●第22号●一九四七・六
仰光通信●第21号●一九四七・六
仰光通信●第22号●一九四七・八
学寮通信●第23号●一九四七・八
仰光通信●第23号●一九四七・一〇
学寮通信●No.24●一九四七・一〇
仰光通信●第24号●未見
学寮通信●第25号●未見
仰光通信●第25号●一九四七・二二
学寮通信●No.26●一九四七・二二
仰光通信●第26号●一九四八・一
学寮通信●No.27●一九四八・一
仰光通信●第27号●一九四八・三
学寮通信●No.28●一九四八・三
学寮通信●No.29●一九四八・四
仰光通信●第28号●一九四八・四
仰光通信●第28号(4・5月合併)●一九四八・五
学寮通信●No.30●一九四八・六
Summer●一九四八・七*

仰光通信●第二十九号●一九四八・七
仰光通信●第30号●一九四八・八
学寮通信●No.31●一九四八・八
学寮通信●No.32●一九四八・九
仰光通信●第31号●一九四八・一〇
ヘレンケラー●一九四八・一〇*
学寮通信●No.33●一九四八・一一
仰光通信●第32号●一九四八・一二
学寮通信●No.34●一九四八・一二
学寮通信●No.35●一九四九・一
学寮通信●No.36●一九四九・二
仰光通信●第33号●一九四九・二
学寮通信●No.37●一九四九・三
学寮通信●No.38〔臨時号〕●一九四九・三
仰光通信●第34号●一九四九・三
仰光通信●第35号●一九四九・四



光明学校「学寮通信」臨時増刊 1946年2月

学寮通信●No.39●一九四九・四
仰光通信●第36号●一九四九・五
仰光通信●第三十七号●一九四九・六*
仰光通信●第38号●一九四九・八*
仰光通信●第39号●一九四九・九*
仰光通信●第40号●未見
仰光通信●第41号●九五〇・一
仰光通信●第42号●九五〇・三
仰光通信●第43号(第44号)●未見
仰光通信●第45号●九五〇・九*
仰光通信●第46号●未見
仰光通信●第47号●一九五一・三*
仰光通信●第48号(1・2・7・8頁欠)●一九五一・九*
仰光通信●第49号●九五二・五*
仰光通信●一九五二・二*
仰光通信●一九五二・四*
学校新聞●No.1●未見
学校新聞●No.2●一九四八・四
学校新聞●No.3●一九四八・五
学校新聞●No.4●一九四八・七
学校新聞●No.5●一九四八・七
学校新聞●No.6●一九四八・九
学校新聞●No.7●一九四八・一〇
学校新聞●No.8●一九四八・一二
学校新聞●No.9●一九四八・一二
学校新聞●No.10●一九四九・二
学校新聞●No.11●未見
学校新聞●No.12●一九四九・三
クラスの友●7●一九四八・六
クラスの友●8●一九四八・七
クラスの友●9●一九四八・一〇
クラスの友●12月号●一九四八・一二
クラスの友●1月号●No.12●一九四九・二
クラスの友●2月号●No.13●一九四九・三
クラスの友●3月号●No.14●一九四九・三



◆第3巻

《日誌・報告・通信ほか》

〔病院宛児童紹介〕の願ひ●日本聾話学校●一九四〇・四
記録疎開学園特別行事(望月管理記録・祝祭日委員)●一九四一・一
おしらせ六つ〔警報発令の時ほか〕●日本聾話学校●一九四二・四
六月中旬教師会〔防空資料点検ほか〕●日本聾話学校教師会●一九四二・六
学園日誌〔日本聾話学校教師会〕●一九四二・七
空襲時に備へてお米のこと●日本聾話学校●一九四二・九*
十二月八日●日本聾話学校●一九四二・一二
おしらせ 空襲の時の注意●日本聾話学校●一九四三・一二
三月の鍛錬行軍●日本聾話学校●一九四三・三
鍛錬行事の疲労状態調査●日本聾話学校教師会●一九四三・三
昭和十八年度生徒の勤労作業●日本聾話学校教師会●一九四三・三*
〔海軍へ献金ほか〕●日本聾話学校●一九四三・六
警報発令から解除まで●日本聾話学校特設防護団●一九四三*
学童用配給のお知らせ●〔日本聾話学校教師会〕●一九四三*
急告〔授業終了〕●日本聾話学校●一九四四・三
おしらせ〔給食のことほか〕●日本聾話学校●一九四四・四
警報発令中の生徒心得●日本聾話学校●一九四四・七
〔理髪計画〕●日本聾話学校●一九四四・九*
お知らせ〔さつまいも頒布ほか〕●日本聾話学校●一九四四・一〇
警戒警報解除と登校●日本聾話学校●一九四四・一一
おしらせ〔防空服装〕●日本聾話学校●一九四四・一二
おしらせ〔降誕節〕●日本聾話学校●一九四四・一二
学生服(冬服)配給に就て●日本聾話学校●一九四四*
至急お願い〔防空用かぶりもの〕●〔日本聾話学校教師会〕●一九四四*
集団疎開のお知らせ●日本聾話学校●一九四五・四

◆第4巻

《回想・研究Ⅱ》

『障害者と戦争』生活体験記録集●日本教職員組合●一九八二・四
信濃路はるか●都立光明国民学校●一九九三・三
「きずな」より●官立盲学校●二〇〇一・三
黒部は永久に●官立東京盲学校学寮月分校●二〇〇二・二
滋野の里●日本聾話学校●二〇〇五・一一
東京の障害児学校の学童疎開バネル解説●二〇〇八・一二
『戦争とわたし』を語る会と戦中・戦後の体験記録(復刻版)●二〇〇九・八
東京の障害児学校の学童疎開第二集証言●二〇〇九・一二
東京の障害児学校の学童疎開第三集図集●二〇一〇・一二
戦後65年シボジウム疎開の中にあつた差別を見つめる●二〇一三・三

障害児学童疎開

資料集 全4巻

●刊行概要

●編 松本昌介（元都立肢体不自由養護学校教員）

飯塚希世（大学図書館勤務）

竹下忠彦（都立特別支援学校教員）

中村尚子（立正大学准教授）

細渕富夫（埼玉大学教授）

●解説 松本昌介（第1巻所収）・飯塚希世（第3巻所収）

●体裁 B5判／上製／総約1、600ページ

●揃定価 8万円＋税（全2回配本）

●序文 逸見勝亮（第1巻巻頭所収）

●推薦 大門正克（横浜国立大学教授）

菊地澄子（児童文学作家）

藤井克徳（NPO法人日本障害者協議会代表）

第1回配本

2017年5月刊 本体40,000円＋税 ISBN978-4-86617-028-2

第1巻 光明学校Ⅰ（巻頭に序文Ⅱ逸見勝亮 解説Ⅱ松本昌介）

第2巻 光明学校Ⅱ（巻末に機関誌類の総目次）

第2回配本

2017年11月刊 本体40,000円＋税 ISBN978-4-86617-031-2

第3巻 日誌・報告・通信ほか／回想・研究Ⅰ（巻頭に解説Ⅱ飯塚希世）

第4巻 回想・研究Ⅱ



*表示価格はすべて税別。



六花出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-28 電話 03-3293-8787 FAX 03-3293-8788 <http://rikka-press.jp>

2017・4／2017・9（改）